

Close-up Interview (9月号 表紙の顔)

# 霜出 佳奈

SHIMOIDE KANA

## 「常にドロ臭く全力で頑張っ、優勝決定戦の舞台には何度でも立ちたい」

プロ7年目、29歳の霜出佳奈プロ。2018年グリコセブンティーンアイス杯での初V以来優勝からは遠ざかっているが、不振をかこつたのは19年の1シーズンのみというランキング上位常連の安定株だ。今季も出場6大会中4大会で入賞し、うち準Vが2回。まだ11大会を残す年内にも、待望の2勝目を挙げるチャンスが巡ってきそうだ——。(PHOTO: 犬童嘉弘)



### 勝ち切れない焦りは「ない」

直近の大岡産業レディースは初日(予選8G)32位と出遅れたものの、その後はステージが上がるにつれて調子上げ、最終日の決勝ラウンドロビン7G目で、ついにTV決勝進出圏の3位に浮上した。

「ひとつ前の東海オープンもまったくレーンが合わずに予選落ち(総合44位)してしまったけど、狙ったとおりには投げられていたので、いい感じで大会に臨んでいました」

3位決定戦は、6月のレディース新人戦で初勝利を挙げて勢いに乗る石田万音との打ち合いを246:237で制し、勇躍「年下の1期先輩」坂本かやが待ち受ける優勝決定戦へ。

「プロ入りが早ければ早いほど場数を踏んできていて、試合に年齢は関係ない。しかも相手はすでに5勝している坂本プロ。胸を借りつつも投げかけていました」

スタートはともに4連発。しかし左レーンの5フレ、霜出の1投は厚めに入ってまさかの4本カウントに(オープン)。

「左のレーンは、その前の3フレが少し曲がって若干厚めのストライクだったので、修正

してアジャストしたつもりが余計に曲がってしまって…。もともと幅を取るラインより、内側に絞るライン取りのほうが得意。それまでは自分のボウリングにピッタリ合っていたのに、そこからとくに左のレーンが合わなくなってしまいました」

結果的にその1ミスが響き、217:259で敗戦。待望の2勝目は、またしてもお預けとなった。

「負けたのは悔しいけど、自分のなかではすごくやり切ったと思える試合でした。坂本プロが本来合わないはずのレーンに合わせてすごい投球をしていたので、仕方ないですね。『帰ってまた練習しよう』と、すぐに気持ちが切り替えられま



▲大岡産業レディースは納得の敗戦。試合後は優勝した「年下の先輩」坂本かやに祝福の拍手を送った7月30日、ボウルアロー・松原店

した(笑)」

勝ち切れない焦りは「今はまったくないです」という。

「準優勝も、5月のグリコ(セブンティーンアイス杯)が4年半ぶり…初めて優勝した年の全日本以来だったので、それまでの年月のほうが辛過ぎて…。最近よくお話をさせてもらっている藤井信人プロが言うには『ひとつ勝てばポンポンと勝てるようになるから、焦らなくても大丈夫。俺も昔は「シルバーコレクター」なんて呼ばれていたんだから』と。今あれだけ波に乗って勝ちまくっているプロでも、何度も悔しい思いをしてきたのだと思うと、私なんかまだまだです(笑)」

### 生活習慣の改善で万事好転

生活面を含めたボウリングへの取り組み方も新人のころとはだいぶ変わり、それが近年の安定した好成績につながっているようだ。

「体を作り直そうと思って、毎朝5時半に起きてジムに行き、朝ご飯をしっかり食べるようになってから調子がよくなりました。いつもこの時期は『動けない、動けない、具合悪い』でグツッとして、お客様からも心配されるくらい体重が落ちたりしていたけど、今はむしろちょっと増えるくらい。丈夫に



▲飛鳥山公園での口け撮り。素の表情をハチリ！

なったし、筋トレすることでポジティブにもなれました」

最近では他のプロとよく話をするようにもなったという。

「以前は『プロだからトーナメントにはお金を稼ぎに来ている』というのが大前提で、他のプロは全員敵と思って試合中はだれともしゃべらなかつたけど、今は同じ契約メーカーのプロと情報交換したり、先輩プロには経験談を聞いたりするし、男子プロや自分より若いプロとも話をします。いろいろ吸収できて考え方も柔軟になりました。もうちょっと早くにそうしとけばよかったかも(苦笑)」

最後に、まだあと11戦を残す今季の目標を尋ねた。

「常にドロ臭く全力で頑張っ、優勝決定戦の舞台には何度でも立ちたいです。優勝で

きるかできないかは多分に運要素もあると思うけど、あの場に立たなければそれすらもないですから。打ち合いのレーンより、しのぎ合いになる難しいレーンのほうが得意なので、そういう大会が多くなるといいですね(笑)」

取材協力: サンスクエアボウル

### 霜出プロと一緒に投げよう！ 近日開催のチャレンジマッチ

- 9月17日 愛知・幸田セントラルボウル
- 9月19日 東京・サンスクエアボウル
- 9月25日 山梨・都留ファミリーボウル
- 10月3日 東京・サンスクエアボウル
- 10月9日 東京・蒲田イモンボウル
- 10月10日 東京・サンスクエアボウル



しもいで・かな / 1994年6月19日生まれ、千葉県出身。163センチ、右投げ。血液型O。2017年プロ入り(50期/ライセンスNo.559)。優勝1回、公認パーフェクト1回。23年度ポイントランキング4位、アベレージ220.26(8月31日現在)。P★League優勝2回。所属: サンスクエアボウル/ハイスポーツ社



## ユース世代の熱い夏

### Vol.6 report 山下 知且

今回はユース、ジュニア層の国際大会についてお話をしたいと思います。

8月20日から25日までシンガポールにて、第22回アジアジュニアボウリング選手権大会が開催され、日本からは選手8名(男女各4名)と下地監督、そして私がチームマネージャーとして参加しました。

日本チームは10種目中8種目で9個のメダルを獲得する大活躍でした。ダブルス戦、チーム戦においては男女ともに金メダルに肉薄しましたが、開催国であるシンガポールに阻止され準優勝でした。

全種目の個人得点、上位男女各16名が総当たりを行うマスターズ戦で、日本女子は濱崎りりあが銀メダル、渡辺希唯



▲アジアジュニア選手権に参加した日本選手団

が銅メダルを獲得。しかし依然として金メダルがないまま迎えた最終種目の男子マスターズ戦、ステップラダーにトップシードで残ったチーム最年少、今年全日本中学選手権者の齋藤大哉が優勝決定戦でシンガポールの選手に勝利し、見

事金メダルを獲得しました。

ちなみに、私は第3回大会に出場していますが、その大会に、23年後にコーチとして参加することができたことには感慨深いものがありました。

タフなレーンコンディションのなか、チーム全員本当によく頑張りました。一方で金メダル8個、銀メダル2個を獲得したシンガポールの強さが際立つ大会でもありました。地の利ということもあるのでしょうか、アカデミーやナショナルチームの強化体制がしっかりとしている印象を強く持ちました。

さて、日本において唯一定期的に開催される公式国際大会をご存知でしょうか。博多スターレーンの閉鎖、コロナ禍、いろいろなことがありました

が、9月の16日から18日まで、福岡市のパピオボウルにて“U22 6th Fukuoka Summer Cup Bowling Tournament 2023 sponsored by STORM”を久しぶりに開催できることは、運営に関わるものとしてこの上ない喜びです。今年はジェイソン・ベルモンテや川添奨太プロも応援に駆けつけてくれます。本当に楽しみです。



やました・ともかつ / 1982年12月5日生まれ、長崎県出身。2000年～2011年ナショナルチーム在籍。2023年6月から長崎県スポーツ協会理事。全日本ボウリング協会理事。2023年4月から長崎県連副理事長。2022年からIBFアスリート委員。